
第2章 自由記述回答から探るより豊かな高齢社会への展望 八王子市中高年齢世代アンケート調査から

前章でも述べたとおり、中間報告では、「中高年齢世代アンケート調査」の選択肢式質問項目から「生きがい」、「幸せ」、「地域とのつながり」に関する分析及び考察を行い、人とのつながりがあることが中高年齢世代の生活に大きく影響を与えていることを明らかにした。

本章では、「中高年齢世代アンケート調査」の自由記述回答を通して、高齢社会をどのように感じているのか、回答者の生の声を把握し分析することで、選択肢式質問項目でみえてきた傾向を補足する具体的かつ詳細な内容を明らかにし、より豊かな高齢社会に向けた展望を探る。

1. 問題設定 分析の背景と目的

- (1) 自由記述回答に着目する意義
- (2) 使用するデータの概要
- (3) 分析の目的と本章の構成
- (4) 分析の方法

2. 自由記述回答全体の傾向

- (1) 頻出ワード上位 40
- (2) 不安感を示している回答者の特徴と不安の中身
- (3) 高齢社会に対して肯定的か、否定的か
- (4) どのような人が高齢社会に対して肯定的回答を寄せているのか

3. より豊かな高齢社会に向けた展望を探る

- (1) 人とのつながりに関する回答の特徴
- (2) 若い世代への思いに関する回答の特徴
- (3) 「健康」というキーワードを使用した回答の特徴
- (4) 仕事に関する回答の特徴

4. 要約と考察 安心して暮らしたいという願いへ向けて

- (1) 人とつながり、協力し合うことの重要性
- (2) 多世代交流のすすめ 若い世代も豊かに暮らせる社会
- (3) 生きがいをもたらす健康と仕事

1. 問題設定 分析の背景と目的

(1) 自由記述回答に着目する意義

アンケート調査においては、多くの場合、最終設問で回答者に自由に記述してもらおう回答欄を設けている。反面、統計的处理がなされる選択肢式回答と比較するならば、調査後の自由記述回答欄の取り扱い、一般的にあって、調査報告の最後に参考程度に紹介されるか、大まかな分類がなされる程度であって、全体として深く分析されることはまれであった。しかしながら、調査対象者の個別の自由記述回答には、当事者の経験や思いが表現されており、当事者のリアリティに接近するためには優れた資料であると同時に、適切な手法をもって分析することによって、選択肢式回答からだけでは明らかにならない傾向を補足する資料となりうる。

こうした考えのもと、本章では、「中高年世代アンケート調査」の最終設問である自由記述について、その内容を分析することを試みる。

(2) 使用するデータの概要

自由記述回答は、「回答者の属性」、「健康状態・移動手手段」、「生活環境」、「人とのつながり」、「地域社会での生活」、「高齢期の就労意向」、「幸せ・生きがい」の7項目30問に及び選択肢式設問の後、最終設問として回答を得たものである。

具体的には、「あなたは、高齢社会をどのように感じていますか。ご自由にお書きください。」という質問文のもと、高齢社会に対するイメージをたずねた。自由記述回答への回答状況は、**図表 2-1**のとおりである。自由記述への回答者は1,223人であり、アンケートの有効回収数に占める回答率は58.8%であった。前段の選択肢式設問数が30問と少なくない中で、多くの市民が、自らの言葉で高齢社会に対する思いを記述している。一方で、前段に上述のような選択肢式設問があるため、ある程度のバイアスがかけられていることは避けられないと思われる。「高齢社会についてどのように感じているか」のみを設問として、単独でたずねたものではないところに、今回の自由記述データの特徴があることを一言付したい。

なお、本章で紹介している原文例は、回答者の原文に忠実に掲載しているが、明らかな誤字の場合に限り、文意を損ねない範囲で修正している。

図表 2-1 自由記述設問への回答状況

配布数	回収数	うち無効票	有効回収数 (a)	自由記述 回答数 (b)	有効回収数に 占める回答率(%) (b/a)
3,000	2,082	2	2,080	1,223	58.8

(3) 分析の目的と本章の構成

本章では、中高年世代が高齢社会をどのように感じているのか、選択肢式質問項目では把握できなかった傾向や、選択肢式質問項目でみえてきた傾向を補足する具体的かつ詳細な内容を、回答者が自由に自分の言葉で記述した中から探っていく。“生の声”から浮かび上がる回答者の思いの傾向を明らかにするとともに、幸せで生きがいのある高齢社会に向けての示唆を導き出すことを目的とする。

具体的には、自由記述への回答者の特徴は、**図表 2-2**、**図表 2-3**(注1)のとおりである。

男女別にみると、女性のほうが、男性に比べて自由記述への回答者が多くなっている。年齢層別にみると、60～64歳までは、高年齢層ほど回答率が高くなっているが、65歳以上では減少に転じている。なお、本市の基本構想・基本計画（2003年）である「八王子ゆめおりプラン」の6地域別には分布の違いはみられなかった。

図表 2 - 2 回答者の特徴（性別）

	自由記述回答の有無		合計
	記述なし	記述あり	
男性	47.0 (428)	53.0 (482)	100.0 (910)
女性	36.5 (421)	63.5 (732)	100.0 (1,153)

・数字は%、カッコ内は人数、n=2,063、無回答は除く
 ・0.1%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.106

図表 2 - 3 回答者の特徴（年齢層別）

	自由記述回答の有無		合計
	記述なし	記述あり	
50 - 54歳	48.8 (121)	51.2 (127)	100.0 (248)
55 - 59歳	39.0 (129)	61.0 (202)	100.0 (331)
60 - 64歳	34.9 (145)	65.1 (270)	100.0 (415)
65 - 69歳	40.8 (157)	59.2 (228)	100.0 (385)
70 - 74歳	39.9 (118)	60.1 (178)	100.0 (296)
75 - 79歳	40.0 (98)	60.0 (147)	100.0 (245)
80 - 84歳	55.8 (82)	44.2 (65)	100.0 (147)

・数字は%、カッコ内は人数、n=2,067、無回答は除く
 ・0.1%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.113

本章の構成は、次のとおりである。

- ）自由記述回答全体の傾向を把握するため頻出ワードを抽出
- ）頻出ワードの上位にある、不安感を示している回答者の特徴と不安感の内容を分析
- ）高齢社会を肯定的に感じているか、否定的に感じているかの傾向を把握、肯定的に感じている回答者の特徴を分析
- ）人とのつながりに関する回答、若い世代に関する回答、「健康」というキーワードを使用した回答の特徴、仕事に関する回答の特徴を分析
- ）分析結果から導かれた考察

（４）分析の方法

多くの回答者による大量の記述内容から、それらが示している全体像について、共通の認識を他の人と共有することは容易ではない。できるだけ客観的な方法を用いて、自由記述という情報の中から、個人の素朴な印象にとどまらない、共有可能な分析結果を導き出すことはできないのだろうか。

市販の文章分析ソフトウェア「IBM SPSS Text Analytics for Surveys」では、多くの回答者による大量の記述内容を、表計算ソフトに比べて効率的に処理することができる。このソフトウェアは、単語やフレーズの出現頻度や、言葉どうしの相関関係から、大量の文章の集まりの意味や内容を分析することを可能とするものである。この手法は、一般にテキストマイニングと呼ばれており、顧客へのマーケティング調査やコールセンターへ寄せられる質問を分析する分野（注2）などで使われている。

この手法を用いて、分析は基本的には次の手順で行った。

- ）分析の目的に関連する単語をキーワードと位置づけ、定義する
- ）定義したキーワードを含んだ自由記述回答を抽出する
- ）回答の中から、キーワードと無関係の内容の回答を除外する
- ）残った回答を内容別に分類する

）及び ）の処理においてソフトウェアを用いた。1,223 人の回答から単語単位で出現頻度を抜き出すことができ、各単語を使用している人数も算出される。この使い方は、テキストマイニングソフトの初歩的な使用方法にとどまっている。また、厳密に文章全体がどのような内容について述べているのかの判断は、分析者自身がなさねばならず、この点にソフトウェアを用いた文章分析手法の限界がある。しかし、大量の回答の中から単語の頻出数を瞬時に出せるなど、分析に欠かせない作業が格段に早くなることは確かである。

2 . 自由記述回答全体の傾向

自由記述回答には、全体としてどのような記述が多いのだろうか。まず、回答の中で多くの人が使っている単語を明らかにする。

（1）頻出ワード上位 40

自由記述回答の中で多く使われている単語では、「不安」、「心配」といった否定的な要素の強い言葉が上位に挙がっている。

実際に回答の中で使われている単語を通して、自由記述回答の特徴を把握することを試みる。中高年世代は、どのような単語を使って、高齢社会に対する思いを表現しているのだろうか。

まず 20 人以上の回答者が使っている単語を頻出ワードとして捉え、上位 40 ワードまでを **図表 2-4** にまとめた。なお、41 位以降の回答は、同順位の頻出ワードが多く、頻出ワードが拡散することから、全体の傾向としての把握が難しくなると判断し、掲出するのは上位 40 位までにとどめた。

図表 2-4 をみると、高齢社会をどのように感じているかの問いに対し、「不安」、「心配」といった、感情面を表現する言葉で、単語それ自体としては否定的な要素の強い言葉が上位に挙がっていることがわかる。反面、「楽しい」(29 人)、「生きがい」(26 人) といった単語それ自体として肯定的な要素の強い言葉は頻出ワードとして挙がってはいるものの、上位 40 位には残らなかった。また、「幸せ」を使用している人は 18 人と 20 人を下回ったため、頻出ワードにはならなかった。

図表 2 - 4 頻出ワード上位 40

順位	頻出ワード	延べ人数	順位	頻出ワード	延べ人数
1	高齢者	258	21	安心	57
2	生活	217		望む	57
3	社会	215	23	老人	55
4	自分	140	24	国	54
5	健康	135	25	仕事	52
6	年金	130	26	迷惑	51
7	不安	119	27	行政	50
8	子供	108	28	元気	49
9	働く	94	29	家族	48
10	若い	86	31	大切	47
	高齢社会	86		介護	46
12	必要	81		老後	46
13	もっと	79		願う	46
14	私	77	34	日本	42
	高齢	77		年	42
16	生きる	74	36	過ごす	41
	医療（費）	74		負担	41
18	暮らす	66		施設	41
19	心配	64		病気	41
20	大変	61	40	金	40

頻出ワードは、それ自体に意味のある単語のみにしており、「なる」、「いる」、「ある」などの単語は入れていない。13位の「もっと」は、「もっと福祉制度を充実してほしい」、「もっと若い人のことを考えてほしい」など“要望”を内容とするものが多かったため、残している。14位の「私」は、家族や他人のことではなく自分のことを話しており、34位の「年」は時間の経過を表すものと自らの年齢を表すものがあったため、意味があるものと判断し残している。

(2) 不安感を示している回答者の特徴と不安の中身

高齢社会に対する不安感を述べている人の割合は 28.1%で、50 歳代の中年層や、子どもがいない人、主観的健康感と生きがい意識の低い人が多い。不安感の内容としては、年金に対する不安、高齢社会全般、将来・今後に対する不安、経済的不安、医療に対する不安、健康に対する不安と続く。

頻出ワード上位 40 のうち、何らかの感情を表す単語の最上位は、7位の「不安」であり、次いで19位の「心配」と続いている。そこで、中高年世代が感じている不安感の具体的な内容は何なのかを、「健康」など他の頻出ワードとの組み合わせを調べることによって分析することとした。なお、21位の「安心」は、「不安」の反対語であるものの、「老後が安心できない」など、「安心でない=不安」という文脈で記述している回答が多いことから、「安心できない」も不安感を示している回答者グループに分類した。

自由記述回答の中で、単語として「不安」、「心配」、「安心」の各頻出ワードを含むものうち、意味内容として、「不安である」、「心配である」、「安心できない」という内容を示す回答を全て抽出すると、344人が該当し、全自由記述回答者数に占める割合は28.1%であった。以下、このグループを「不安感を示す回答者グループ」として記述していく。

不安感を示している回答者の特徴

それでは、自由記述で高齢社会に対する不安感を示している回答者はどのような特徴をもつ中高年なのだろうか。選択肢式質問項目への回答からわかる、年齢層など人口学的特性、一人暮らしか否かなど家族特性といった項目とのクロス分析からみていくことによって、不安感を記述した中高年の特徴を捉えておきたい。

まず、自由記述回答の中で、高齢社会に対する不安感を記述しているかどうかについて、年齢層別にみた結果が**図表 2-5**である。年齢層の低い人のほうが、年齢層の高い人よりも高齢社会に対する不安感を記述している人が多い傾向がみられる。

なお、男女別には不安感の記述の有無に違いはみられなかった。

図表 2-5 年齢層別（5歳毎）にみた高齢社会に対する不安感の記述の分布

	不安感		合計
	記述なし	記述あり	
50 - 54歳	67.7 (86)	32.3 (41)	100.0 (127)
55 - 59歳	64.4 (130)	35.6 (72)	100.0 (202)
60 - 64歳	70.7 (191)	29.3 (79)	100.0 (270)
65 - 69歳	71.5 (163)	28.5 (65)	100.0 (228)
70 - 74歳	76.4 (136)	23.6 (42)	100.0 (178)
75 - 79歳	77.6 (114)	22.4 (33)	100.0 (147)
80 - 84歳	83.1 (54)	16.9 (11)	100.0 (65)

・数字は%、カッコ内は人数、n=1,217、無回答は除く

・5%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.111

図表 2-6は、子どもの有無によって、自由記述における不安感の記述の分布に差があるかどうかを調べた結果である。子どものいない人のほうが、子どものいる人よりも高齢社会に対する不安感を記述している人が多い傾向がみられる。

なお、一人暮らしか否か、配偶者の有無によって不安感の記述の有無に違いはみられなかった。

図表 2-6 子どもの有無別にみた高齢社会に対する不安感の記述の分布

	不安感		合計
	記述なし	記述あり	
子どもなし	64.1 (84)	35.9 (47)	100.0 (131)
子どもあり	72.8 (795)	27.2 (297)	100.0 (1,092)

・数字は%、カッコ内は人数、n=1,223、無回答は除く

・5%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.060

図表 2-7は、健康度の自己評価である主観的健康感の高低によって、自由記述における不安感の記述の分布に差があるかどうかを調べた結果である。自分はとても健康だと感じている人は、そうではない人に比べて、高齢社会に対する不安感を記述している人が少ない傾向にある（注3）。

図表 2 - 7 主観的健康感の程度別にみた高齢社会に対する不安感の記述の分布

	不安感		合計
	記述なし	記述あり	
健康ではない	73.6 (53)	26.4 (19)	100.0 (72)
あまり健康ではない	70.7 (128)	29.3 (53)	100.0 (181)
まあ健康である	69.7 (559)	30.3 (243)	100.0 (802)
とても健康である	83.1 (133)	16.9 (27)	100.0 (160)

・数字は%、カッコ内は人数、n=1,215、無回答は除く

・1%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.100

図表 2 - 8 は、人から頼りにされ、活躍の場があるといった、生きがい意識の高低によって、自由記述における不安感の記述の分布に差があるかどうかを調べた結果である。生きがい意識が高い人のほうが、低い人に比べて高齢社会に対する不安感を記述している人が少ない傾向となっている。

図表 2 - 8 生きがい意識の程度別にみた高齢社会に対する不安感の記述の分布

	不安感		合計
	記述なし	記述あり	
低い	73.9 (244)	26.1 (86)	100.0 (330)
やや低い	63.3 (174)	36.7 (101)	100.0 (275)
やや高い	70.0 (189)	30.0 (81)	100.0 (270)
高い	78.6 (264)	21.4 (72)	100.0 (336)

・数字は%、カッコ内は人数、n=1,211、無回答は除く

・0.1%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.124

これらのことから、高齢社会に対する不安感を記述している人の特徴として、高年齢層よりもむしろ 50 歳代など中年層のほうが多いこと、子どものいる人よりも子どものいない人のほうが多いこと、生きがい意識の高い人よりも低い人のほうが多いことを指摘することができる。なお、暮らし向き（経済的ゆとり感）、親しい他者の人数やサポート関係の充実度といった人とのつながりの程度、主観的幸福感の程度によって不安感の記述の分布に違いはみられなかった。

不安の中身

このような特徴をもつ 344 人の回答内容を、何に対する不安感であるのかを焦点に分類したものが図表 2 - 9 である。回答者の不安感の内容は、大きく 12 項目に分類することができ、不安の対象は多様なものであることがわかる。

不安感の内容としては、年金に対する不安感が最も多く、17.0%となっている。次いで高齢社会全般に対する不安感 13.5%、将来・今後・老後に対する不安感 13.3%、経済的不安感 8.1%、医療に対する不安感 7.9%、健康に対する不安感 7.7%と続いている。

原文例は、各項目の象徴的なもの、特徴を表していると思われるものを取り上げた。不安感を感じている対象は多岐にわたっており、なるべく不安を感じている具体的状況が述べられているものを抜き出している。

図表 2 - 9 不安感の内容の分類とその件数

順位	分類	延べ件数及び割合
1	年金への不安感	82件 (17.0%)
2	(高齢社会自体への)不安感	65件 (13.5%)
3	将来・今後・老後への不安感	64件 (13.3%)
4	経済的不安感	39件 (8.1%)
5	医療(費)への不安感	38件 (7.9%)
6	健康への不安感	37件 (7.7%)
7	生活に対する不安感	35件 (7.3%)
8	介護(サービス・施設)への不安感	35件 (7.3%)
9	高齢になった時・自立できなくなった時(介護される)不安感	20件 (4.2%)
10	一人暮らし(になった時)の不安感	19件 (4.0%)
11	政治・行政・国の将来への不安感	18件 (3.7%)
12	若い世代への不安感	13件 (2.7%)
13	その他の不安感	16件 (3.3%)
	計	481件 (100.0%)

延べ件数：複数の項目について自由記述している1名の回答は、その内容毎に各項目に数えている

【不安感に関する原文例】

1. 年金への不安・心配・安心(できない)

「年金だけでは生活は無理。これから先が不安です。」

2. (高齢社会自体が)不安・心配・安心(できない)

「大変に不安に思う。色々な意味で心配。」

3. 将来・今後・老後に対する不安・心配・安心(できない)

「先の見えない老後生活に不安を感じています。」

4. 経済的不安・心配・安心(できない)

「経済的不安を感じてます。弟と二人で住んでますが仕事も不安定で精神的ゆとりがほしいです。」

5. 医療(費)への不安・心配・安心(できない)

「自分が高齢になる時にはゆったり好きなことを楽しみながら日々を過ごせると思っていたが、現実には働かなければ生きていけない状況で、さらに歳をとって一体どのようになるか不安です。せめて医療の心配はないようになってほしい。」

6. 健康への不安・心配・安心(できない)

「健康に不安。病院に入院して治療を受けられるか。3ヶ月入院の後は病院を転々としなければならぬと聞いている。高齢者が十分な治療を受けられるようお願いしたい。」

7. 生活に対する不安・心配・安心(できない)

「高齢社会は安心して生活が出来なくなるのでは…。不安がいっぱいです。」

8. 介護（サービス・施設）への不安・心配

「歳をとると介護は大変です。共倒れのないよう、安心して暮らせる施設を作ってほしい。」

9. 高齢になった時・自立できなくなった時（介護される）不安・心配

「主人と二人の生活です。どちらかがこれから病気になった時、介護が大変だと思う。共倒れになるおそれがあり、とても心配です。だれでも入れる施設を是非作ってほしい。」

「自立した生活が送れなくなった時の不安が一番です。施設に入所も難しいと聞きます。より積極的に老老介護なども考えていかなければ、解決していかないのではと考えます。」

10. 一人暮らし（になった時）の不安・心配・安心（できない）

「老人ホームに入りやすい対応をしてほしい。一人暮らしの時を心配している。」

11. 政治・行政・国の将来への不安・心配・安心（できない）

「お先真暗です。政治が悪い。若い人が働く所も思うようになく、年寄りには不安です。」

12. 若い世代への不安・心配・安心（できない）

「若年層が将来に希望を持ってない現況に、とても不安を感じます。」

13. その他の不安感

「退職後も働きたいが、仕事があるか不安。」

以上より、生きがい、幸せ、人や社会とのつながりに関する現状や意識を中心にたずねた選択肢式質問項目からはみえてこなかった、これから先の将来へと続くさまざまな不安感の現状が浮き彫りになった。

しかしながら、ここで不安感の内容を分類したものの、健康への不安がそれに伴う医療費への不安とつながっているなど、実は、各不安感は互いに深く絡まり合っている。高齢社会や高齢期に対する不安感、不安の対象毎に個別にはっきりと分かれているものではなく、加齢に伴った自らの健康状態の変化、年金生活へと移行することによる生活の変化といった、未知の状態に対する不安感が互いに影響し合っているものであったり、生活全般に対する複合的不安であることが考えられる。

（3）高齢社会に対して肯定的か、否定的か

全自由記述回答のうち高齢社会に対して否定的な回答をした人は49.8%であり、肯定的回答をした人は18.9%である。否定的回答は「個人的に満たされない事柄」に対しての不安感が多く、肯定的回答は生きがいや楽しみなど「現在及び将来にわたる希望や可能性」について触れられている。

ここまで、キーワードと不安感の中身に注目して、自由記述回答の傾向を把握してきた。しかし、先に指摘したとおり、高齢社会に対する不安感、未知の状態に対するものや、生活全般に対する複合的なものであると推察できる。そこで、より広い意味で、中高年世代が高齢社会をどのように感じているのか、その大まかな傾向を明らかにしてみたい。

ここでは、1,223人からの全自由記述回答を、「否定的内容」、「肯定的内容」、「否定的・肯定的両方を含んでいるもの」、「どちらにも当てはまらないもの」の4つに分類するため、次のような手順で作業を行った。

）高齢社会への否定的なキーワードを抽出し、これを定義する（**図表2-10**）

）定義した「否定的キーワードを含む回答」と「それ以外の回答」に分類する

）「否定的キーワードを含む回答」から、「否定的キーワードを含んでいるものの、文脈としては肯定的な意味内容の回答」、「否定的意味内容と肯定的意味内容の両方を含んでい

る回答」、「どちらにも当てはまらない回答」を抜き出し、この3つ以外を「否定的内容」として分類する

- ）の「それ以外の回答」を、「否定的な意味内容の回答」、「肯定的意味内容の回答」、「肯定的・否定的な意味内容の両方を含んでいる回答」、「どちらにも当てはまらない回答」に分類する
- ）最終的に ）と ）を合わせ、4つの分類「否定的内容」、「肯定的内容」、「否定的・肯定的両方を含んでいるもの」、「どちらにも当てはまらないもの」を作成する（注4）

図表 2 - 10 否定的なキーワード

不安	心配	安心(できない)		大変	病気	困る
無理	死ぬ	厳しい	孤独	暗い	苦しい	認知症
孤独死	不安定	淋しい	悲しい	無情	苦労	死
安楽死	不満	残念	弱者	冷たい	衰える	弱い
貧しい	不幸	自殺	負	生きにくい		

分類の結果、高齢社会に対して「否定的内容」を回答した人は609人で、全自由記述回答1,223件のうち49.8%を占めた。一方、「肯定的内容」を回答した人は231人(18.9%)、「否定的・肯定的内容両方を含んでいるもの」を回答した人は192人(15.7%)、「どちらにも当てはまらないもの」を回答した人は191人(15.6%)であった。高齢社会をどのように感じているかという設問に対して、およそ半数の回答者が否定的なイメージを記述していることがわかる。

もう少し詳しく分類毎の内容をみていくと、高齢社会に対して否定的な回答としては、主に、高齢社会そのものに対して悲観的な感情を示すもの、高齢期の病気や経済的問題を心配するもの、子どもへの負担を心配するものなどがあつた。否定的な内容に関しては、自らの生活・健康・家族への不安や心配など、「個人的に満たされない事柄」に対して、目が向けられていることがわかる。今後の自分の生活がどうなるか、介護されるようになったら入れる施設があるか、一人暮らしになったらどうするかなど、個人的に自分の将来の生活全般を案じている。

それに対して肯定的な回答内容は、主に、長寿社会を歓迎するもの、高齢になっても社会に参加できる社会であってほしいというもの、生きがい・張りがあれば高齢社会は生き生きと過ごせるというものなどがあつた。社会とつながりを持ち続けることを望み、何を楽しみとするかについて触れるなど、「現在及び将来にわたる希望や可能性」に目が向けられている。自らの可能性を信じ、適切な機会や場所があれば社会とつながりを持ち、活躍することができるのではという内容となっている。

一方、否定的・肯定的内容の両方を含む回答は、主に、現状を心配しながらも解決策を提案する内容となっている。

以上のように4つに分類した原文例を次に示した。否定的・肯定的内容がさまざまな角度から述べているものを取り上げた。

【否定的内容の回答原文例】

「あまり幸せではない。淋しく思う。」

「現状では高齢者は負い目を感じる。」

「少ない夫の年金より天引きの金額が増し、一病も持ち、これからの生活がどうなっていくか先々の不安がいっぱいです。」

「長寿社会になって、体があちらこちら故障がでてきて、医療費・入院費などが大変なので、高齢者医療の免除など、考慮して下さい。」

「同居している親の世話は大変なので、自分の子どもにはさせたくない。子どもに経済的に頼らないためにも長く働いて、自分の面倒は自分でみられるようにしたい。あまり長生きしたいと思わない。」

「政治上の安心感がないことが、近年、非常に残念。未来に対する不安がある。若者・子ども達が希望・目標をもって生きられる社会でないと、安心した高齢化社会とはいえない。」

【肯定的内容の回答原文例】

「70歳を過ぎても健康であれば、職業をもって働ける場があれば、生き甲斐になると思います。」

「平均寿命が延びている現在、70歳位まで仕事(会社での正社員)ができ、社会に参画できる社会になって欲しい。人は社会に加わってこそ気力や体力や知力が保たれると思います。」

「憲法で保障されている、健康で文化的な最低限度の生活ができるような政策をとってもらいたいと同時に、年寄りに生きる張りを与えるような政策と、社会の中で生きていることに価値があるように思える老人対策をとってほしい。働く場が与えられれば、元気に社会貢献できる老人はたくさんいます。」

「高齢になっても家にこもらず、楽しく生き生きと毎日が暮らせる公共の施設や、「講座・公演」や音楽・スポーツなど最寄りの市民センターとかで数多く行って欲しいと思う！」

「私は68歳です。高齢者の一人です。社会のせいにして生きている方がいっぱいおりますが、私は違うと思います。自分自身、考え方を少し変えると、毎日が楽しく生きられると思う。何でも他人のせい・社会のせいと思っている人達は悲しいと思う。孫の面倒をみるのも楽しい生き方だと思う。私は今が一番幸せです。」

【否定的肯定的両方の内容の回答原文例】

「私たちがそれだけ長生きしている証拠で、結構なことです。が、将来、生活の安全上のことで、かなり不安も感じています。」

「まわりの同世代を見渡すと一人暮らし、外出不自由、配偶者の介護と、安心して自由に動ける人が少なくなっていますので、核家族で子ども達も近くに住んでいません。お互いに近くに住んでいるお年寄り同士でも、動ける人が心配りを心がけたいものです。あたたかい言葉、ちょっとした心遣いが老人をホッとさせるようです。」

【どちらにもあてはまらない内容の回答原文例】

「まだ50代ということもあり、わかりません。」

(4) どのような人が高齢社会に対して肯定的回答を寄せているのか

高齢社会に対して肯定的な内容を記述した人は、主観的健康感が高く、暮らし向きにゆとりがあり、親しい友人数が多く、サポートを期待できる相手が多様で、生きがい意識が高い。一方で、男女別、年齢層別、一人暮らしか否か、配偶者の有無、子どもの有無によっては違いがみられなかった。

ここでは、高齢社会に対して肯定的な内容の意見を記述した人と、否定的な内容の意見を記述した人を比較することによって、肯定的な内容の意見をもつ中高年の特徴を、選択肢式質問項目への回答との関連から明らかにする。具体的には、肯定的内容の回答者と否定的内容の回

答者を比較する方法をとり、その他に分類した回答(「肯定的否定的の両方」及び「どちらでもない」)は欠損値扱いとして、分析からは除外した。

比較に用いる自由記述回答における高齢社会に対するイメージの分布は**図表 2 - 11**のとおりである。全体的にみて、否定的内容の自由記述回答が多いことを前提に、以下の分析を進める。

図表 2 - 11 自由記述回答における高齢社会に対するイメージ

否定的内容の回答	72.5	(609)
肯定的内容の回答	27.5	(231)

・数字は%、カッコ内は人数、n=840

・肯定、否定以外に分類された回答383件は欠損値扱いとした

まず、自由記述回答の中で、高齢社会に対して肯定的なイメージを回答している人は、否定的なイメージを回答している人に比べて、どのような特性の人たちが多いのかを分析した。その結果、男女別、年齢層別に違いはみられず、また、一人暮らしか否か、配偶者の有無、子どもの有無によって回答傾向に違いはみられなかった。

次に、主観的健康感の高低が、高齢社会に対するイメージに影響を与えているのかどうかを調べた結果が**図表 2 - 12**である。主観的健康感が高い人のほうが、主観的健康感が低い人に比べて、高齢社会に対して肯定的な内容の記述をしている人が多い傾向がみられた(注5)。

図表 2 - 12 主観的健康感別にみた高齢社会に対するイメージ

	否定的内容	肯定的内容	合計
健康ではない	80.8 (42)	19.2 (10)	100.0 (52)
あまり健康ではない	81.6 (102)	18.4 (23)	100.0 (125)
まあ健康である	72.3 (399)	27.7 (153)	100.0 (552)
とても健康である	57.9 (62)	42.1 (45)	100.0 (107)

・数字は%、カッコ内は人数、n=836、無回答は除く

・0.1%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.148

図表 2 - 13は、経済的ゆとり感でみた暮らし向きによって、自由記述における高齢社会に対するイメージに分布の違いがあるかどうかを調べた結果である。経済的にゆとりがある人のほうが、ゆとりがない人に比べて、肯定的な内容の記述している人が多い傾向がみられた。

図表 2 - 13 経済的ゆとり感別にみた高齢社会に対するイメージ

	否定的内容	肯定的内容	合計
ゆとりはない	85.9 (158)	14.1 (26)	100.0 (184)
あまりゆとりはない	72.4 (205)	27.6 (78)	100.0 (283)
ややゆとりがある	66.7 (196)	33.3 (98)	100.0 (294)
ゆとりがある	63.5 (47)	36.5 (27)	100.0 (74)

・数字は%、カッコ内は人数、n=835、無回答は除く

・0.1%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.171

人とのつながりがある人は、高齢社会に対して肯定的イメージを回答している人が多いといえるのだろうか。具体的には、親しい他者がいたり、さまざまな人とサポート関係を築いているなど、人とのつながりをもっている人は、そうでない人よりも高齢社会に対して肯定的イメージを回答している人が多いのだろうか。

図表 2 - 14 は、親しい友人数によって、高齢社会に対するイメージの記述の分布に違いがあるかどうかを調べた結果である。親しい友人数が多い人のほうが、少ない人に比べて、高齢社会に対して肯定的内容を記述している人が多い傾向がみられた（注 6）。

図表 2 - 14 親しい友人数別にみた高齢社会に対するイメージ

	否定的内容	肯定的内容	合計
0人	77.4 (168)	22.6 (49)	100.0 (217)
1人	79.3 (96)	20.7 (25)	100.0 (121)
2人	73.0 (103)	27.0 (38)	100.0 (141)
3～4人	69.8 (104)	30.2 (45)	100.0 (149)
5人以上	65.1 (138)	34.9 (74)	100.0 (212)

・数字は%、カッコ内は人数、n=840、無回答は除く

・5%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.119

図表 2 - 15 は、ちょっとした用事や体調が悪い時の世話といった手段的サポートを期待できる相手の種類の多様性の程度によって、高齢社会に対するイメージの記述の分布に違いがあるかどうかを調べた結果である。手段的サポートを期待できる相手の種類が多様である人ほど、高齢社会に対して肯定的内容を記述している人が多い傾向がみられた（注 7）。

また、図表は省略するが、悩み相談、声かけといった情緒的サポートや用事、世話などの手段的サポートを自ら提供できる相手の多様性の程度によって、高齢社会に対するイメージの記述の分布に違いがみられるかどうかを調べた結果でも、自らサポートを提供できる相手が多様である人ほど、高齢社会に対して肯定的内容を記述している人が多い傾向がみられた。

図表 2 - 15 他者に期待できる手段的サポート量別にみた高齢社会に対するイメージ

	否定的内容	肯定的内容	合計
少ない	81.1 (43)	18.9 (10)	100.0 (53)
やや少ない	74.4 (218)	25.6 (75)	100.0 (293)
やや多い	74.1 (209)	25.9 (73)	100.0 (282)
多い	64.9 (131)	35.1 (71)	100.0 (202)

・数字は%、カッコ内は人数、n=830、無回答は除く

・5%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.103

・他者に期待できる手段的サポートとは、「ちょっとした用事やおつかいをしてくれる相手」、「あなたの体調が悪いとき、世話をしてくれる相手」の種類を合計し、サポートを期待できる相手方の種類の多さ、少なさを得点化したものである。得点は0～22点の間で分布しており、少ない(0～1点)、やや少ない(2点)、やや多い(3～4点)、多い(5点以上)の4カテゴリーに再分類した。

図表 2 - 16 は、生きがい意識の高低によって、高齢社会に対するイメージの記述の分布に違いがみられるかどうかを調べた結果である。生きがい意識の高い人のほうが、低い人に比べて、肯定的内容の記述をしている人が多い傾向がみられた。

図表 2 - 16 生きがい意識の程度別にみた高齢社会に対するイメージ

	否定的内容	肯定的内容	合計
低い	81.0 (188)	19.0 (44)	100.0 (232)
やや低い	75.5 (145)	24.5 (47)	100.0 (192)
やや高い	70.4 (133)	29.6 (56)	100.0 (189)
高い	62.4 (138)	37.6 (83)	100.0 (221)

・数字は%、カッコ内は人数、n=834、無回答は除く

・0.1%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.159

図表 2 - 17 は、「現在、わたしは幸せだと思う」という現在の幸福感に対する回答と自由記述における回答傾向との関連をみたものである。現在の幸福感の高い人のほうが、低い人に比べて、肯定的内容の記述をしている人が多い傾向がみられることがわかる。図表は省略するが、「これから先、なにか楽しいこと、おもしろいことがありそうだ」という将来に対する肯定感に対する回答と自由記述における回答傾向との関連を検討した結果も、同様の傾向がみられた。

図表 2 - 17 現在の幸福感の程度別にみた高齢社会に対するイメージ

	否定的内容	肯定的内容	合計
思わない	95.9 (47)	4.1 (2)	100.0 (49)
あまり思わない	80.5 (70)	19.5 (17)	100.0 (87)
やや思う	73.2 (249)	26.8 (91)	100.0 (340)
そう思う	66.3 (238)	33.7 (121)	100.0 (359)

・数字は%、カッコ内は人数、n=835、無回答は除く

・0.1%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.167

以上をまとめると、自由記述の中で、高齢社会に対する肯定的内容を記述している人は、否定的内容を記述している人に比べて、次のような特徴をもっている。すなわち、主観的健康感が高い、暮らし向きにゆとりがある、親しい友人が多くおり、人とのサポート関係が充実しているなど人とのつながりが形成されている、生きがい意識が高い、主観的幸福感が高いという特徴が、自由記述における肯定的内容の回答と結びついている。これらのことから、より多くの方がこのような状態を実現し、継続することが可能となるしくみを育てていくことが、高齢社会を前向きに捉えていくことに結び付いていくと考えられる。

3. より豊かな高齢社会に向けた展望を探る

(1) 人とのつながりに関する回答の特徴

人とのつながりに関する回答者の割合は 19.3% である。女性のほうが男性よりも多い傾向を示しているが、年齢層別での分布に違いはみられない。家族、友人、近所とのつきあいを大切に思い、人や社会とつながることを望む一方で、周りとの関わりを少なく感じ、今後一人暮らしになった時を心配しながらも、家族には迷惑をかけたくないとする傾向がみられる。

自由記述回答においては、高齢社会に対して、約3割の中老年世代が「不安」、「心配」、「安心(できない)」という言葉で不安感を示していることや、約半数の回答者が否定的な内容を記述していることが、ここまでの分析でわかってきた。また、自由記述回答と選択肢回答とのクロス分析からは、生きがい意識や主観的幸福感の高い人のほうが、これらの低い人に比べて自由記述回答に肯定的内容を書き込んでいること、主観的健康感が高い人や、人とのつながりのある人のほうが、そうでない人に比べて、肯定的内容を書き込んでいることが明らかになった。

これらのことは、高齢社会に対する中老年世代の不安や否定的感情がわたしたちの暮らす社会に厳然と存在していることと同時に、これらの不安などの否定的感情を少しでも軽減し、克服していくための手立てを示唆しているのではないだろうか。事実、自由記述回答の中には、不安などの否定的感情と生きがい、幸せ、つながりといった言葉を文章の中で同時に使い、人とつながり、誰かとともにあることから高齢社会に対する前向きな展望を記述している回答も少数ながら見受けられた。

その原文例は、次のとおりである。

【生きがい、幸せ、つながりといった言葉が不安と同時に使われている回答原文例】

「政治・経済への不安の中、高齢社会に...格差がでてきて不安でもある。しかし、生きがい、人とのつながりができれば、老後は孤独にならず、豊かな生活ができるのではないのでしょうか。」

「高齢社会であることは誇りに感じ、幸せなことと思います。しかし、時々、現実には不安に感じる事が多くて心配でなりません。安心して生活できる、全ての人が日本の社会をみんなで協力し、努力してつくっていきたいと思います。」

「自分の将来に不安を感じています。子どもは独立し、一人で老後は生活しなければならなくなると思います。自立し、健康に留意して、友人・知人等と交流し、楽しい日々を過ごせたらと思っています。」

また、「中老年世代アンケート調査」の選択肢式質問項目どうしの関連を探った中間報告における分析からは、中老年自身の人や社会とのつながりがあることを表すさまざまな現状が、生きがいや幸せをより感じる要因であることが明らかになっている(注8)。

そこで、自由記述回答の中で、人とのつながりに関連する記述のある回答に着目し、中老年世代が人とのつながりについてどのように記述し、いかなる問題意識をもっているのかを明らかにする。

1,223人による自由記述回答のうち、人とのつながりに関するキーワードを用いている回答は236人で、自由記述回答者に占める割合は19.3%であった。なお、人とのつながりに関するキーワードとして定義した単語は**図表2-18**のとおりである。

図表2-19をみると、これらのつながりに関する記述をしている人は、女性のほうが、男性よりも多い傾向がみられるが、年齢層別での分布に違いはみられない。

図表 2 - 18 人とのつながりに関するキーワード

単語から人とのつながりが連想される静態的単語

家族、家庭、地域、地域社会、地域活動、近所、近隣、身内、仲間、友達、友人、サークル、自治会

単語から人とのつながりが連想される動態的単語

絆、交流、互い、ともに、一緒、つながり、つながる、助け合う、ふれあい、さしのべる、分かち合う、支え合う、協力

人とのつながりが希薄な状態を表す単語

淋しい、寂しい、核家族、こもる、孤立、孤立感、一人暮らし、一人生活、孤独、孤独死

図表 2 - 19 男女別にみたつながりに関する記述の分布

	つながり		合計
	記述なし	記述あり	
男性	85.3 (411)	14.7 (71)	100.0 (482)
女性	76.1 (557)	23.9 (175)	100.0 (732)

・数字は%、カッコ内は人数、n=1,214、無回答は除く

・0.1%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.112

中高年世代のつながりに関する回答内容の特徴を、大まかに分類すると、図表 2 - 20 のとおりである。

図表 2 - 20 人とのつながりに関する回答内容の分類と件数

順位	分類	延べ件数及び割合
1	家族・友人・知人との絆を大切に自立して生きたい	84件 (34.1%)
2	近所・地域とのつきあいが大切だ	73件 (29.7%)
3	高齢になった時(自立できなくなった時)に家族に迷惑をかけたくない	31件 (12.6%)
4	高齢になるにつれて、周りとの関わりが少なくなっている	26件 (10.6%)
5	健康に留意して、周りとの関わりながら楽しく過ごしたい	13件 (5.3%)
6	現在一人暮らしであり、病気になった時が心配である	12件 (4.9%)
7	現在は家族がいるが、将来一人になった時の生活が心配である	7件 (2.8%)
	計	246件 (100.0%)

人とのつながりに関する回答の内容としては、「家族・友人・知人との絆を大切に自立して生きたい」という内容が最も多く 34.1%、次いで「近所・地域とのつきあいが大切」とする回答が 29.7%、「高齢になった時に家族に迷惑をかけたくない」が 12.6%、「高齢になるにつれて、周りとの関わりが少なくなっている」が 10.6%、「健康に留意して、周りとの関わりながら楽しく過ごしたい」が 5.3%、「現在一人暮らしであり、病気になった時が心配」が 4.9%、「現在は家族がいるが、将来一人になった時の生活が心配」が 2.8%となっている。

これらのことから、人とのつながりに関する自由記述回答においては、家族や友人との絆、

近所や地域とつきあうことが大切だという認識や、健康を保ちながら、周りとともに楽しく過ごしたいという望みといった、高齢社会を人や社会とつながることによって受けとめていこうという考えがみえてくれる。一方、現状においては、近所や周りとの関わりの少なさを抱えていながらも、自らそれを解消するための行動を起こすまでには至っていない姿や、今後一人になったり、病気になったときに頼れる人や場所がないことを心配しているが、家族には迷惑をかけたくない気持ちがあることがわかる。

【人とのつながりに関する回答原文例】

1. 家族・友人・知人との絆を大切に自立して生きたい

「健康なうちは働ける環境づくりが必要。核家族化が進みすぎており、高齢社会では家族の絆が必要。」

2. 近所・地域とのつきあいが大切だ

「人間、誰でも高齢になる。地域の方々、近所の方々、若い方々と協力し合い、安心して生活したい。」

「他力本願になっていることを心配しています。高齢化しても健康で自立化を基本としながら、万一のことを考えて近所づき合いに重点を置き、しっかりとした絆づくりをすることが出来るような環境づくりが重要だと思います。」

3. 高齢になった時（自立できなくなった時）に、家族に迷惑をかけたくない

「子どもや他人に経済や介護など迷惑をかけたくない。あまり長生きしたくない。体に気をつけて控えめに生きて行きたい。」

4. 高齢になるにつれて、周りとの関わりが少なくなっている

「人とのつながりが薄くなり、淋しく感じています。サロンの様な気軽に立ち寄れる場所がふえるのを期待します。」

「よくわかりませんが、厳しい現実がまわっていると感じています。地域や関係団体に入って自分の場所を作る努力をしていかないと、大変だと思います。」

5. 健康に留意して、周りとの関わりながら楽しく過ごしたい

「現在 80 歳ですが、健康で、ありがたい事に年金も戴いているので、生活も楽しんでます。今後、できるだけボランティアや町内の行事、友好に参加したいです。」

6. 現在一人暮らしであり、病気になった時が心配である

「78 歳で一人暮らしです。歳を重ねるにつれて不安感が強くなります。今は健康でも、多くの実例が示す様に、自分もいつ同様なことになるか。その時、どうするか。生きがいはもてるのか。本当に頼れる人は居るか？」

7. 現在は家族がいるが、将来一人になった時の生活が心配である

「不安。最後に一人の生活になった時、安心出来る環境が確保されるか心配。経済的な面で、年齢とともに困ってくる。」

(2) 若い世代への思いに関する回答の特徴

若い世代に対する回答をした人の割合は 17.9% である。若い世代に迷惑や負担をかけたくない、とする内容が最も多く、若い人へ経験や知恵を伝え、協力し合っていきたいという内容、若い世代を心配する内容と続いている。

より豊かな高齢社会の実現を考えるにあたり、念頭に置かなければいけないのは、高齢社会とは人口構造のバランスに着目した概念であって、「高齢者の社会」と同義ではないことである。わたしたちの暮らす社会は、多様な世代で成り立っていると同時に、高齢期はある日突然訪れるものではなく、人が年齢を重ねることによってゆっくりと近づいてくるものである。誰もが通る道であり、どのような人もやがて高齢者となり、何らかのかたちで自分よりも若い世代に支えられるときがくる。

実際、自由記述回答の中には、現在や将来の自分自身の生活に不安や心配を感じながらも、若い世代に対して迷惑をかけたくない、という回答も見受けられた。このように、高齢社会を高齢者だけの問題として捉えるのではなく、高齢社会を支え、やがて高齢期を迎える若者、子どもたち、孫たちへとつなげる問題として捉え、考えを述べている回答が少なからずあったことから、次に若い世代に対する思いを述べている回答をみていきたい。

1,223人の自由記述回答うち、若い世代に関するキーワードを用いている回答者は219人で、自由記述回答に占める割合は17.9%である。なお、若い世代に関するキーワードとして定義した単語は**図表2-21**のとおりである。**図表2-22**をみると、これらの若い世代に関する記述をしている人は、女性のほうが、男性よりも多い傾向がみられるが、年齢層別には分布に違いはみられない。

図表2-21 若い世代に関するキーワード

子ども	若い	世代	若者	若い人	孫	子
年代	息子	幼児	青年	若い者	学生	祖父母
大学	幼い	後輩	親子	娘		

図表2-22 男女別にみた若い世代に関する言及の分布

	若い世代		合計
	記述なし	記述あり	
男性	86.3 (416)	13.7 (66)	100.0 (482)
女性	79.6 (583)	20.4 (149)	100.0 (732)

・数字は%、カッコ内は人数、n=1,214、無回答は除く

・1%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.085

若い世代に関する回答の特徴を、大まかに分類すると、**図表2-23**のとおりである。

図表 2 - 23 若い世代に関する回答内容の分類と件数

順位	分類	延べ件数及び割合
1	子どもや若い人に迷惑・負担をかけたくない 若い人が気の毒である	80件 (35.3%)
2	若い人へ経験や知恵を伝え、協力し合っていきたい 若い人を育むことも必要	40件 (17.6%)
3	若い人が心配だ (仕事がない若年層の増加、若い世代の年金はどうなるか)	22件 (9.7%)
4	若い人が希望をもてて、子育てしやすいような社会に (少子化が高齢化の要因だ)	18件 (7.9%)
5	若い世代でなく、もっと高齢者への政策を手厚くすべきである	17件 (7.5%)
6	子どもに世話になろうと思っている	10件 (4.4%)
7	親子間・若い世代・若い子どもとのかかわりが希薄である	8件 (3.5%)
8	その他	32件 (14.1%)
	計	227件 (100.0%)

若い世代に対して、「迷惑・負担をかけたくない」という内容が最も多く、35.3%となっている。次いで、「若い人へ経験や知恵を伝え、協力し合っていきたい」という内容が17.6%、「若い人が心配」が9.7%、「若い人が希望をもてて、子育てしやすいような社会に」が7.9%、「若い世代でなく、もっと高齢者への政策を手厚くすべき」が7.5%、「子どもに世話になろうと思っている」が4.4%、「親子間・若い世代・若い子どもとのかかわりが希薄である」が3.5%となっている。原文例は次に示すとおりである。

最も多かった、「子どもや若い人に迷惑・負担をかけたくない」という回答の中には、回答者自身が自分や配偶者の親族の介護を経験し、そのことから子どもには同じ負担をかけたくないという内容がみられた。また、若い人が希望をもち、子育てのしやすい社会になってほしいと願ったり、自らの経験や知恵を若い世代へ伝え、交流していききたいという気持ちがあるものの、実際には、若い世代と交流する機会が少ないと捉えている記述もあった。若い世代に対して、迷惑や負担はかけたくないが、交流できる機会はほしいと考えており、すぐ近くではなく、適度な距離をとったつきあいを望む姿がみてとれる。

【若い世代に関する回答原文例】

1. 子どもや若い人に迷惑・負担をかけたくない / 若い人が気の毒である

「高齢者がふえつづけ、子ども達も自分自身の生活が大変なので、なるべく私達の事で心配はかけられないのが現状です。これから年金生活になっていきますが、子どもに迷惑をかけないで頑張っやっていこうと思います。」

2. 若い人へ経験や知恵を伝え、協力し合っていきたい / 若い人を育むことも必要

「高齢社会になっても、高齢者が安心して生きていける為に一番大事なことは若者を社会全体で育てていくことだと思う。新卒者が仕事につけないような社会・組織に発展はないと

思う。」

3. 若い人が心配だ（仕事がない若年層の増加、若い世代の年金はどうか）

「これからの日本はどうか心配です。老人が多く、若い人の仕事がない。経済成長なし。福祉はどうかなるだろ...子ども達の年金は...老後も大事ですが、若い人の仕事がない方が心配です。」

4. 若い人が夢や希望をもてて、子育てしやすいような社会に

「高齢化社会をより豊かに暮らしていくために、地域社会とのつながりや人間関係など、さまざまな方策を探ることは大事である。が、それ以上に次の世を担う若い世代の者が就職や結婚や子育てなどを、安心してできる世の中に変えていかなければ高齢化社会がますます不安なものになる。」

5. 若い世代でなく、もっと高齢者への政策を手厚くすべきである

「前からこの時代が来る事はわかっていたはず。もっと高齢者の為に考えて下さい。一番困っているのは高齢者ですから。子どもの事も大事なのはわかりますが、みんなやって来た事。高齢者にこの先、楽しみながら生きがいを持てる事になってくれたらと思います。」

6. 子どもに世話になろうと思っている

「近所のお友達が骨折して困っていても、自分が病気があるので手伝ってあげたいが出来ない。他の友達もみんな高齢で、病気がある為、自分の事に大変なので出来ない。やはり、自分の子にしか世話になれない。」

7. 親子間・若い世代・幼い子どもとのかかわりが希薄である

「高齢化社会に入り、近所でも若者・子ども達が少なくなり淋しい。」

(3) 「健康」というキーワードを使用した回答の特徴

「健康」というキーワードを使用した回答者の割合は 8.7%である。健康を大切にしたいという内容が最も多く、健康なうちは働きたい、趣味やボランティアをしたいという内容が続いている。健康であることは、高齢期の生きがいや幸福感に影響を与え、高齢期を前向きに捉える基盤となっている。

前出の図表 2 - 4 「頻出ワード上位 40」の中で、「健康」は第 5 位となっており、不安感の具体的内容としても、「健康」は第 6 位に挙がっている。なお、自分の健康状態に対する自己評価である主観的健康感、中高年世代の生きがい意識や幸福感に影響しており、主観的健康感が高いほど生きがいや幸せを感じていることが明らかになっている（注 9）。

また、自由記述回答に示された高齢社会に対する不安感やイメージと、選択肢回答における主観的健康感とのクロス分析でみてきたように、主観的健康感が「とても健康」な人に比べて、そうではない人の方が、不安を感じている人が多い傾向や、主観的健康感が高い人ほど高齢社会を前向きに捉えている傾向にあることがわかっている。

このように、中高年世代にとって、健康は主要な関心事であるとともに、生活全体の質や生活意識に大きな影響をもつ要因である。そこで、「健康」というキーワードを使った回答が、具体的にどのような内容となっているかをみていきたい。

自由記述回答者 1,223 人のうち、健康というキーワードを用いている回答は 106 人で、自由記述回答者に占める割合は 8.7%である。

なお、健康に関する記述をしている人は、性別、年齢層別に分布に違いはみられない。健康に関する回答の特徴を大まかに分類すると、図表 2 - 24 となっている。

図表 2 - 24 「健康」というキーワードを使用した回答内容の分類と件数

順位	分類	延べ件数及び割合
1	健康を大切にしたい	33件 (29.2%)
2	健康なうちは働きたい	18件 (15.9%)
3	健康に不安がある	13件 (11.5%)
4	健康で趣味・ボランティアをしたい	13件 (11.5%)
5	健康に気をつけて自立していきたい	11件 (9.7%)
6	子ども・周囲に迷惑にならぬよう健康に気をつけたい	7件 (6.2%)
7	健康に気をつけて生活を楽しまたい	6件 (5.3%)
8	その他	12件 (10.6%)
	計	113件 (100.0%)

「健康を大切にしたい」という回答が最も多く、29.2%となっている。次いで、「健康なうちは働きたい」が15.9%、「健康に不安がある」、「健康で趣味・ボランティアをしたい」がそれぞれ11.5%、「健康に気をつけて自立していきたい」9.7%、「子ども・周囲に迷惑にならぬよう健康に気をつけたい」6.2%、「健康に気をつけて生活を楽しまたい」が5.3%となっている。

【「健康」というキーワードを使用した回答原文例】

1. 健康を大切にしたい

「健康が一番。」

「加齢に従い、心身のおとろえとさみしさが深くなってきています。やはり、健康であることが幸せで安心感を与えてくれます。他人にはやさしく迷惑をかけたくないのが高齢者のやさしい思いやりであり、願いです。」

2. 健康なうちは働きたい

「70歳を過ぎても健康であれば、職業をもって働ける場があれば、生き甲斐になると思います。」

3. 健康に不安がある

「私は健康を害しています。高齢になってなおいっそう健康であることの大切さが増してくると思います。精神的、肉体的に健康でいられるような行政を望みます。」

4. 健康で趣味・ボランティアをしたい

「健康を第一に、出来る限りボランティア活動・趣味のスポーツを続けられるように、前向きに生活して行きたいと思う。」

5. 健康に気をつけて自立していきたい

「自分の健康は自分で管理していかなければと思います。いくつになっても自分の事は自分でできるよう、ふだんから心がけてゆきたいと思います。」

6. 子ども・周囲に迷惑にならぬよう健康に気をつけたい

「健康に気をつけて、子ども達の負担にならない様に頑張りたい。」

7. 健康に気をつけて生活を楽しまたい

「健康に留意して、一度だけの人生を楽しみたいと思います。」

高齢期においては、健康を前提としたうえで、働きたい、趣味やボランティアをしたい、自立していたいという回答が多くみられることがわかる。上記の原文例の3などのように、年齢とともに健康に不安が現れ、そのことによってより健康の大切さを自覚している様子がうかがえる。中高年期における健康とは、自らの高齢期や高齢社会を前向きに捉えるための基盤であり、その先の仕事などの生きがいや趣味など、外への楽しみに目を向けることのできる状態にするものだということがわかる。

(4) 仕事に関する回答の特徴

仕事に関する回答をしている人の割合は7.8%である。働きたい理由としては経済的理由が最も多く、ほぼ同数で、生きがいであること、役に立ちたいということを挙げており、社会に参加していたいという内容が続いている。高齢期における仕事が、経済的な対価だけではなく、社会に参加することであり、生活の「張り」になりうるということがみてとれる。

「中高年世代アンケート調査」において高齢期における就労意向をたずねたところ、58.4%の人が、適当な仕事があったら、いくつになっても何らかのかたちで働きたいと回答している(注10)。また、現在働いていない人であっても、37.6%の人が就労意向をもっており、このうち、65~74歳で39.5%の人が、75~84歳で21.5%の人が就労意向を示している。

また、前出の図表2-4「頻出ワード上位40」において、「仕事」は第25位に挙げられている言葉である。そこで、仕事に関する回答に着目して、具体的内容をみていきたい。

自由記述回答者1,223人のうち、「仕事」に関するキーワードを用いている回答は95人で、自由記述回答者に占める割合は7.8%である。仕事に関するキーワードとして定義した単語は図表2-25のとおりである。

図表2-25 仕事に関するキーワード

仕事	働く	働ける	雇用	職	労働力	就職	ワークシェアリング
----	----	-----	----	---	-----	----	-----------

図表2-26をみると、相対的に若い世代の人が、仕事に関する記述をしている人が多い傾向がみられる。なお、男女別に回答傾向に違いはみられない。

図表2-26 年齢層別にみた仕事に関する記述の分布

	仕事				合計	
	記述なし		記述あり			
50 - 64歳	89.0	(533)	11.0	(66)	100.0	(599)
65 - 74歳	94.6	(384)	5.4	(22)	100.0	(406)
75 - 84歳	96.7	(205)	3.3	(7)	100.0	(212)

数字は%、カッコ内は人数、n=1,217、無回答は除く

・0.1%水準で有意差あり、クラマーの χ^2 係数=.121

仕事に関する回答の特徴を大まかに分類すると図表 2 - 27 のとおりである。「経済的理由から」働きたいが最も多く 21.2%となっており、「生きがい・張り・役に立ちたいから」が 19.2%、「社会に参加してきたいから」が 11.5%と続いている。

図表 2 - 27 仕事に関する回答内容の分類と件数

順位	分類	延べ件数及び割合
1	経済的理由から	22件 (21.2%)
2	生きがい・張り・役に立ちたいから	20件 (19.2%)
3	社会に参加してきたいから	12件 (11.5%)
4	家にこもらないようにするため	4件 (3.8%)
5	自立のため	3件 (2.9%)
	認知症の予防のため	3件 (2.9%)
	小遣いのため	3件 (2.9%)
	経験を生かすため	3件 (2.9%)
9	体を動かすため	2件 (1.9%)
10	理由なし	32件 (30.8%)
	計	104件 (100.0%)

働きたい理由としては、経済的な理由が多かったものの、ほぼ同数で生活への張りや役に立ちたいという生きがいに関する理由が挙がっている。「社会に参加してきたいから」、「家にこもらないようにするため」という回答もあり、中高年世代にとっての仕事は、単に対価を得るためだけのものとしては、捉えられていない側面が浮かびあがった。

これらのことから、意欲があっても年齢による一律の退職制度によって退かざるを得ないことに不満をもち、仕事をすることによって社会に参加しているのだという認識がみてとれる。中高年世代、とりわけ高齢期にとっての仕事とは何か、なぜ社会に参加してきたいと感じるのか。自由記述にみられた回答は、高齢期において、できる範囲での自立や社会参加を望んでおり、高齢社会への主体的かつ前向きな働きかけとあってよい。働くということが、人に自分が必要とされている喜びをもたらし、家にこもることをさせず外へと連れ出し、高齢期の生きがい、張り合いになりうるということがわかる。

【仕事に関する回答内容原文例】

1. 経済的理由から

「年金だけでは生活するのは無理だと思えます。その時、何らかの職業で少し経済的にゆとりが出来ないと困るのではないかと思います。」

2. 生きがい・張り・役に立ちたいから

「高齢者が自分で小さな仕事でも張りをもって、社会にあまりあまえないで長生きをすることが最高の幸せだと思えます。」

「高齢者を単なる年金生活者にさせない社会を築くことが必要。世の中に貢献させるにしても、労働と対価を考えるべき。働く喜び・得る喜びを持たせて意欲を持ち続けさせる。週

2～3日の好きな労働、そして、少なくとも対価。それにより生きる喜び・あてとされる喜びが得られる。」

3．社会に参加していきたいから

「生きる ということは、社会との関わりがあって初めて 生きている という実感が得られると思う。生年月日によって年齢を切るのではなく、その人の活動意欲や能力によって判断して行ってほしい。自分が歳を重ねて行って初めて理解できる事も沢山ある。何事も前向きに生きて行きたい…。現在は自分のキャリアを生かした仕事に就いている。仕事が出来る環境に感謝している。」

4．家にこもらないようにするため

「元気で働けるならば 60 歳を過ぎても働きたい。仕事がなくなると家にこもってしまうので、60 歳で定年は早過ぎる。」

「精神的・経済的に少しでもゆとりを持って暮らせるように。それには、働きたい希望のある者には年齢制限を設けずに働けるように。ひきこもらないように務めて外に出るよう、一人ひとりが心がけていければいいと思います。」

5．自立のため

「元気で働けるうちは働き、極力、外出して社会にかかわりを持ち、友人・知人と交流して明るく毎日を生きる（いくつになっても、自立して子どもに負担をかけないで暮らす）」

6．認知症の予防のため

「健康であるなら 65 歳～70 歳位迄、仕事が出来ると思います。社会参加の機会が多い程、認知症にはなりにくくなるのでは。」

7．小遣いのため

「高齢になったら働けないとつまらない。少しでも小遣いがあることで心の余裕がほしい。」

8．経験を生かすため

「体力的にまだ頑張れる人は今までの経験をいかせる様に、働ける場所を提供してもらえるといいと思うし、小さい子など、人とのコミュニケーションをとれる場所があるといいと思います。」

9．体を動かすため

「高齢であっても働きたい意志のある方は働ける社会になってほしい。」

4．要約と考察 安心して暮らしたいという願いへ向けて

「高齢社会をどのように感じているか」との質問に対する回答の分析を通してみえてきたのは、「一人ひとりが健康で自立しながら、自分の生きがい・楽しみをもち、人とのつながり、地域とのつきあいを大切にする高齢社会」を理想とし、「安心して暮らしたい」と願う中高年世代の姿であった。

加齢からくる健康状態の変化、年金生活への移行など、高齢期はさまざまな変化が訪れる時期でもある。そうした未知の状態を迎えることへの不安感や生活全般に対する複合的不安感は、回答内容を分類するのが困難なほど、互いに影響し合っているものであった。

1,223 人から寄せられた自由記述回答はさまざまな課題を浮かび上がらせており、単純な処方箋を挙げることは難しいが、本分析からみえてきた、今後、より豊かな高齢社会を目指す上で重要と思われる3つの視点を挙げたい。

(1) 人とつながり、協力し合うことの重要性

自由記述回答の中で、感情を表すキーワードとして最も多く使われた単語は、「不安」であった。不安の対象は、自らの経済的な暮らし向き、医療、健康、介護、一人暮らし、若い世代の今後など、自らや社会全体の、現在から今後にかけての不透明感に対するものである。

しかし、高齢社会に対して不安感などの否定的感情を持ちながらも、それを少しでも軽減していく手立てとして、人とのつながりに関する記述がみられたことも事実である。具体的には、家族や友人との絆、近所や地域とのつきあいといった、人とのつながりや協力があれば、心配事の多い高齢期や高齢社会を何とか乗り越えていけるのではないかと、という展望が描かれているものであった。

反面、これからの姿としてではなく、今の現実として、近所とのつきあい、地域とのつながりの大切さを認識してはいるが、踏み出すための一歩をどうはじめていいのか迷う姿や、家族とのつながりを大切に思いながらも、核家族化が進む中、独立し離れて暮らす子どもには迷惑をかけず自立していたいと望む気持ち、頼れないと悩む姿もみえてきた。

また、高齢社会に対して肯定的内容を寄せた回答者は、否定的内容を寄せた回答者に比べて、親しい友人が多い傾向をもち、自らが頼ったり、人から頼られたりするサポート関係が充実している傾向がみられるなど、人とのつながりを構築している人が多かった。

これらのことから、変化する現実がそのまま不安に転じがちな高齢期と、不透明感が覆う今後の高齢社会であっても、人とのつながりを形成していくことが、現実をよりよい方向に変化させる原動力となるのではないだろうか。人とつながることは、小さな社会とつながることもある。小さな社会は、また別の小さな社会へとつながっていく。あいさつすることから始まる人とのつながり、互いを気にかけて、サポートし合うことの大切さ。まずは、すぐに身近なところから始めてみるのが、人とつながる第一歩となる。行政としては、そのような人とのつながりを生み出すきっかけづくりに対する支援や、きっかけを活かせる適当な場所に対する支援を行うことこそが、つながりを生み出す素地を整えることにはならないだろうか。

(2) 多世代交流のすすめ 若い世代も豊かに暮らせる社会

高齢社会化の進行は、今後避けては通れない課題を次々と顕在化させていくであろう。しかし、これからの取り組み次第によって、その様相は変えられるものでもある。自由記述回答の中には、若い世代に関する記述も一定数みられ、その多くは、今後の高齢社会を支える若い世代も安心して生活できる社会にしなければ、という考えを示していた。自らの生活に不安を感じながらも、若い世代には迷惑や負担をかけたくないという考えや、高齢社会は、高齢者のみならず、他の世代にとっても希望の持てる社会である必要性が述べられている。これらの回答と、若い世代へ経験や知恵を伝え、協力していきたい、若い世代を育むことが大切だ、という回答を重ね合わせてみれば、より豊かな高齢社会を創造していくうえでの重要なヒントを与えてくれる。

つまり、豊かな高齢社会とは、高齢者だけが幸せな社会ではなく、高齢者を含めた全ての年齢層にとって幸せな社会であり、「長生きしたい」と思える社会なのではないか。そのためには、高齢者の不安を軽減していくことのみならず、同時に若い世代の現在や将来の不安も軽減していくことが求められている。社会保障制度の課題など、国を挙げて克服しなければならない課題は列を成しているが、わたしたちが日常から始められることとして、多世代で日頃から日常的にふれあい、協力し合うしくみによって、多様な世代の不安を緩和していくことも可能なのではないだろうか。

例えば、本章でみたように、高齢社会に対して不安感を示している人は、高年齢層よりも、むしろ 50 歳代など相対的に若い世代のほうが多かった。どのような人も、年齢を重ね、やがて高齢期を迎える。高齢期の心と身体がどのように変わっていくのかなど、未来の自分の姿である高齢者を理解しようとしたり、自らを取り巻く社会環境の変化を予想し、それへの対応策を少しずつ始めてみることによって、これから高齢期を迎える世代の不安感を和らげることができるかもしれない。そのためには、同じ世代とだけつきあうのではなく、自由記述回答にもあったように、異なる世代間の交流が希薄な状況を変えていく必要がある。

これらのことから、豊かな高齢社会を創造していくためには、単に高齢期だけを取り上げて、その充実に向けた施策のみを張り巡らせるのではなく、高齢者を支える若い世代のための施策も重要である。多世代間の日常的な交流や協力が可能で、若い世代も暮らしやすくなるような、横断的施策を展開させることができれば、どの世代も安心して暮らせる社会を行政が後押しすることができるのではないだろうか。

(3) 生きがいをもたらす健康と仕事

自由記述回答の中で、「健康」というキーワードは重要な位置を占めていた。健康とは、とくに高齢期に失いかねない不安の対象であるとともに、だからこそ大切にしたい、暮らしを支える基盤であると認識されている。健康なうちは働きたい、健康なままでボランティアや趣味などの生活を楽しみたいという内容もみられ、充実し、安心できる高齢期のためには、健康を保つことは1つの大きな土台になっているといえる。

自由記述回答において、高齢社会に対する不安感や否定的感情を示した人は、健康度の自己評価である主観的健康感が高い人よりも低い人のほうが多かった。この傾向は、自らを健康だと感じていられることが、それ自体安心できる、心強いものであり、自らの高齢期や高齢社会に対する前向きさと関連していることをうかがわせる結果である。

この意味において、高齢期における健康は、単に身体的に病気がない状態だけをいうわけではない。体調不安を抱えても、楽しみ、生きがいがあり、行きたい場所、会いたい人がいて、自分が誰かに必要とされている感じをもっていられることが重要なのではないだろうか。

また、自由記述回答では、「仕事」に関する記述も一定数みられた。働きたい理由としては、経済的理由とともに、多くの人が、生きがい、張り、社会に参加して役に立ってほしい、自立してほしいという前向きな気持ちを表現していた。働くことを通して社会とつながり、人に必要とされる喜びを感じ、自分で自分の生活を成り立たせることを重要視していることがわかる。なお、「中高年世代アンケート調査」の選択肢式質問項目の結果からは、いくつになっても適当な仕事があったら何らかのかたちで働きたいという回答が約6割にのぼることがわかっており、自由記述回答は、働きたいと考える理由の一部を、具体的に示しているといえる。

年齢を重ねても、誰かからいつまでも必要とされ、何らかの役割が果たせる社会になるためには、多くの人が人生の時間の大半を費やす、生活を支えるための仕事のように、対価のある、社会の役にたっていると感じられる場所が重要である。この意味で、若い世代との適切な役割分担などバランスをとりながら、高齢期の雇用が広く開かれる道は否定されてはならない。

しかし、それまでの仕事を定年退職などで失った場合、生きがいはすぐに失われてしまうのだろうか。人生の重心が、例えば定年退職のある仕事に大きく傾き過ぎていると、それを失った時の喪失感、何をしてもよいかわからない気持ちは大きいだろう。意欲のある人が働き続けられることはもちろん大切であるが、自らの生きがいとなるようなもの、楽しいと感じられるものは、いわゆる「仕事」に偏りすぎず、早い時期からできるだけ多くもっていた方がよいので

はないだろうか。

また、わたしたちの暮らしを見渡してみれば、社会の中で必要な機能、求められている必要な役割だと多くの人を感じてはいても、十分には供給されていないサービスや機能がたくさん存在している。経験やアイデアを活かして、新たな仕事、役割を生み出していくことや、対価のある仕事がなくとも、楽しいと思えること、誰かとつながることで、思ってもみなかったことが自分に合っているなど、新たな発見があるかもしれない。

高齢期は、社会的役割からの離脱の過程であるといわれてきた。しかし、今後の超高齢社会をよりよいものにしていくためには、一人ひとりの力が欠かせず、小さくても新たな役割の創出過程として高齢期を捉えていくこと、まずは行動してみる事が重要なのではないか。アメリカの思想家、ラルフ・ウォルド・エマーソンに「全ての壁は扉である」ということばがある（注 11）。新たな扉を開け、生きがいを探すためには、自らがまず一步を踏み出してみることが必要なのではないだろうか。行政には、その意欲に応えられるだけの多様性と柔軟性をもった試みが期待されている。

第2章 注

- 1) 以下のクロス集計した変数の統計的有意性の評価にあたっては、カイ二乗検定を行った。また、順序づけできない離散変数間の連関の強さを確認するために、クラマーのV係数を算出した。
- 2) 自治体においてテキストマイニングという手法を利用した事例としては、仙台都市総合研究機構（2004）が、仙台市と共同で実施した、行政に寄せられる膨大な市民の声を整理し、そこから情報を掘り出し政策に反映させる方策を検討した報告書がある。また、最近では、仙台市の東日本大震災からの復興計画に関する意見交換会や住民アンケート等で収集された定性データの分析、内容把握の際の試みがある。
- 3) 通院頻度の高低によって不安感の記述の分布に違いはみられず、病院に頻繁に通っている人のほうが、そうでない人よりも不安感を記述している人が多いという傾向はみられなかった。
- 4) どちらにも当てはまらない内容が否定的内容もしくは肯定的内容と同時に記載されている場合、否定的、肯定的のどちらかに分類した。また、どちらにも当てはまらないについては、「～してほしい」、「～を望む」という要望・希望を示す回答のほか、「健康でいたい」など個人レベルの願いや希望のみの回答を含んでいる。
- 5) あわせて、通院頻度の高低が高齢社会に対するイメージに影響を与えているか否かを調べた結果、通院頻度が高い人のほうが、通院頻度が低い人に比べて、高齢社会に対して肯定的内容の記述をしている人が多い傾向がみられることがわかった（5%水準で有意差あり、クラマーのv係数=.097）。通院頻度が高い人のほうが、高齢社会を否定的に捉えている人が多いという傾向はみられず、逆に、通院頻度が低い人のほうが、高齢社会を否定的に捉えている人が多い傾向がみられた。通院している人は健康に気を遣っており、より健康に暮らそうという意欲が、高齢社会に対する肯定的イメージにつながっているのかもしれない。
- 6) 親しい他者の合計人数、親しい親族数、親しい近隣数の多少では分布に違いはみられなかった。
- 7) 悩み相談などの情緒的サポートを期待できる相手の種類の多様性の程度では分布に違いはみられなかった。
- 8) 西田、福田、村上（2011） pp.43-88 を参照されたい。
- 9) 生きがい意識については、西田、福田、村上（2011） pp.49-51、幸福感については、八王子市都市政策研究所（2010）、pp.134-137 を参照されたい。
- 10) 八王子市都市政策研究所（2010） pp.145-147 参照。
- 11) スペンソン（2008） pp.102-103 参照。

第2章 参考文献

- ・ スペンソン, J. 『扉の法則』(弓場隆訳)、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2008年
- ・ 仙台都市総合研究機構 『「市民の声」の活用法に関する調査研究』、2004年
- ・ 内閣府 『高齢社会白書(平成23年版)』、2011年
- ・ 西田奈保子、福田純、村上薫 「八王子市中高年世代アンケート調査からみた「より豊かな高齢社会」 生きがい・幸せ・地域とのつながりを中心に 」 『まちづくり研究はちおうじ』第7号、八王子市都市政策研究所、2011年
- ・ 八王子市都市政策研究所 『八王子市における中高年世代の生活実態と生活意識に関する調査報告書』、2010年